

令和7年度鶴岡市子ども読書活動推進委員会 第1回 議事録

○日 時 令和7年7月24日（木）15：30～

○場 所 鶴岡市図書館 講座室

○出席者 出席委員 井上裕子委員、渡邊敦委員、三浦洋介委員、谷江るみ委員
粕谷温子委員、田村裕委員、佐藤まりこ委員、富田喜美子委員
(委員9名のうち8名出席)

欠席委員 石川敦委員

○市側出席職員

教育長 成澤和則、教育部長 白幡有、健康課長 五十嵐亜希、子育て推進課長 成沢真紀

社会教育課長 五十嵐依久子、図書館長 五十嵐恭子、健康課保健師 押野明純

子育て推進課主査 進藤夕子、かたばみ保育園主任 佐藤 厚子

学校教育課指導主事 本間 紘、社会教育課主事 齋藤喜久瑛、図書館主事 成沢亜衣

○傍聴者 0名

○協議題等

- ・報告・協議 (1) 推進委員会等の体制について
- (2) 鶴岡市子ども読書活動推進計画の背景と取り組み状況について
- (3) 第3次鶴岡市子ども読書活動推進計画について
- (4) その他

○発言要旨

・報告・協議

- (1) 推進委員会等の体制について
事務局より説明（委員より質問・意見はなし）
- (2) 鶴岡市子ども読書活動推進計画の背景と取り組み状況について
資料1～3について事務局より説明（資料2については担当各課より説明）
- (3) 第3次鶴岡市子ども読書活動推進計画について
資料4・5について事務局より説明
- (4) その他

(委員)

所属している読み聞かせボランティアでは、夏のおはなし会を予定している。

資料にもあるように、参加者の年齢が下がっていて小学生の参加が少ないことを実感している。子どもが図書館に来るには、親御さんに来てもらうしかない。親子で楽しめる行事ができるよう企画している。

近年、若いお父さんの参加が多く、子どもが両親と一緒におはなし会を楽しんでくれる姿が見え、大変嬉しく感じている。

(委員)

小学校では大体の学校で朝読書、週1回は本を読む時間を確保していると思う。

そういった時間を学校が作ることで、読書の楽しさや新たな発見があり、読書好きにするきっかけになるのではないかな。

資料2の説明の中で、移動図書館の運行場所が増えたという説明があったが、それは要望があり増えたものか。

(図書館長)

毎年巡回ルート組んで巡回場所を決めているが、追加募集を行って要望があったところの他、現在のルートの中に組み込むことができそうな施設に声掛けをするなどし、随時巡回場所を開拓しているという経過がある。

(委員)

図書館の本館や分館まで距離がある学校では、移動図書館を子どもたちが大変楽しみにしていた。移動図書館の巡回場所が増えたのは、大変いいことだと思う。

(委員)

保育園でも移動図書館のバスに月に一回来てもらい、年長児は実際にバスの中で本を選ぶ体験を楽しみにしている。子どもたちはすごく絵本が好きだが、保護者に図書館の利用を勧めると借りた場合に返しに行くことが大変だという声もあった。返却ポストのようなものが町中にあると、より気軽に借りられるようになるのではないかな。

(委員)

高校では、学習センターを生徒たちが適宜活用しているが、空調設備の故障のため今夏の利用状況は低迷していた。授業でも有効に活用していると聞いている。

資料の不読率の割合を見て、小中学校で読書の習慣を身につけているはずだが、高校になると1ヶ月全く本を読んでない割合が約半数という結果に驚いた。要因はスマホゲームではないかと考えられる。進学校でも、アンケートを取ると1日平均3時間は当たり前にスマホを使っている状況であり、時代が変わり便利になっていく中で今まで大事にしてきた心の教育が薄れていくことが心配だと感じている。

また、調べ学習の方法については、現代はインターネットでも簡単に検索できるが誤った情報もあるということを理解し、自分の手で複数の文献を使って調べることが大事ということを教えていかなければならない。

(委員)

子どもと一緒に図書館に行く機会があっても、仕事や家事をしている中では、親はどうしても読書の時間は確保が難しいという現状がある。

また、子どもは学習用のタブレットを持っているが、学習以外に動画を見る時間も多くなってしまっている現状がある。

(委員)

昨今の子どもの様子を見ていると、小さい子どもでも塾や部活動などで時間がないと感じる。その中で、本の楽しさを伝えていくことが大切であり、自分もその活動を支えていけたらと思っている。

(委員)

子どもたちが必要性を感じることや、やりたいことがあるかが大切だと思っており、“本”については学校の役割は非常に大きいと感じている。

大人は不読率が60%を超えている現状があり、その状況で子どもに読ませようとしていることが間違っているのではないかな。そもそも本を読む必要性ということについて考えながらも、創造性という意味では、本を読んだ方がいいと思っている。

子どもたちに向けた活動としては、本好きになるような機会を多く作ることを徹底し、子どもたちが自ら本を読みたい、読書は必要なことだと認識することが、読書することに繋がっていくのではないかな。

(子育て推進課長)

昨年度子ども会議を開催し、小中学生 8 人から集まってもらい、自分の理想の居場所を考えようというテーマで意見交換を行った。その際、図書館や本屋を挙げた参加者がおり、その他にも本を読みながら交流ができる場所という意見が多くあり、本を身近に感じている子どもが多い印象を受けた。

しかしその一方、子どもだけでは図書館に行くことができないという問題も挙げられており、子どもの身近に本に触れられる機会や場所を設けられるよう、計画の中に入れていけたらと思う。

(社会教育課長)

先日社会教育課の主催で地域子育て講演会を開催し、AI 社会に生きる子どもたちについてお話を伺った。その中で、現代は AI 等便利に使うことができるものが存在するが、そういった社会の中でも五感を大切にしながら学んでいく重要性を改めて実感した。そこで、読書の機会、想像力を膨らませる機会というのも、必要なことだと感じた。

(健康課長)

健康課では、健診会場内の絵本コーナー設置や、子育て応援ギフトで絵本お渡しするといった事業を行っているが、その絵本に触れることを通じて親子の愛着形成に繋がっていると思う。就寝前にわずかな時間でも一緒に本を読むなど、親子関係を作る上でも小さい頃の本との関わりが大事だと感じる。

(かたばみ保育園)

子どもに関わる大人へのアプローチという部分で、親子参観時に図書館を利用するプログラムを作るなど、図書館に関わる機会を保育園側から作るようにしている。結果として、親子の触れ合いや、送迎時に図書館を親子で利用することに繋がっていくのではないかな。

(委員)

アンケート結果の中で、小学生の本を読むのはあまり好きではない、または好きではないという割合が高いと感じた。保育園児は、本が嫌いな子はほぼいないと感じており、本が嫌いな理由などを探ることで新しいものが見えてくるのではないかな。